

歴史叙述のなかのイヴァン雷帝 (I)

栗生沢 猛 夫

<はじめに>

ロシア史上イヴァン雷帝¹⁾の治世(1533~84)は一つの重大な転換期であった。それは何よりもまず、国内の諸地方の統一を終えたばかりのモスクワ国家が中央集権的な体制、ロシア流に言えば「専制」самодержавиеへと転化しよ

原稿受領日 1983年5月9日

- 1) イヴァン四世の渾名《Грозный》は本稿では「雷帝」と訳し、以下の叙述では主にこの名称でイヴァン四世のことを表わしたい。この名称はドイツ語で“der Schreckliche”ないし“der Grausame”, 英語で“the terrible”, フランス語で“le terrible”などと訳出されることが多いことから推察されるように、とくにオプリーチニナに代表される残酷な圧制との関連で、否定的に理解されることが多い。だがこの語は支配者の渾名としてもすでに14世紀初頭から知られており(トヴェリ大公ドミトリー・ミハイロヴィチ、とくに「雷帝」の祖父イヴァン三世の例が高名)、元来は称賛の言葉として用いられていたことが早くから指摘されている。イヴァン四世に関しては、同時代史料には(クールプスキーやイヴァン自身の著述を含めて)この名称はほとんど見られないが(Я. С. Рюричは16世紀にはまったく例がないとすら言う。他方 M. Шефテルは民間説話、歌謡を引き合いに出してそこから重要な仮説をひき出しているが、これについては慎重な吟味が必要であろう)、この語の一般的な用法は変らなかった。イヴァン四世が確かに「雷帝」とよばれたのが何時で、誰によってであったかは慎重な検討を要する問題であるが、И. Персвэутфが《Ты—государь грозный и мудрый》(「汝、厳格にして賢明なる君主」)とよんでいるのが早い事例の一つであろう。いずれにせよ、この名称は少なくとも歴史的には確立された名称ではなかった。それでも本稿でこの語が主に用いられるのは、それが歴史叙述の上では18世紀以来市民権を獲得してきたからであり、もっぱら便宜上のことにすぎない。「雷帝」名称問題については、さしあたり M. Szeftel, The epithet *Groznyj* in historical perspective, in 《The Religious World of Russian Culture》, Russia and Orthodoxy: Essays in Honor of G. Florovsky, v. II, The Hague/Paris 1975, pp. 101-115 を参照。ルリエの指摘については、《Переписка Ивана Грозного с Андреем Курбским》(Text подготовили Я. С. Лурье и Ю. Д. Рыков), Л. 1979. стр. 383, Персвэутфの言については《Сочинения И. Персвэтова》под ред. Д. С. Лихачева, М.-Л. 1956. стр. 172. を参照。

うとしていた時期であった。それはまた、従来「ルーシの地」と考えられた地域を越えて、ロシアが北と西へ、特に、東と南へ領土を拡大し始めた時期でもあった。このような動きは当然国内の経済的發展と密接に結びついていた。生産力は上昇し、労働の社会的分業と生産面における各地方間の分業（専門）化が進み、貨幣経済が拡大・浸透した。かくして都市タイプの聚落が各地に成立・發展し、いわゆる「全ロシア市場」成立の諸前提が形成された。H. E. ノーソフの言を借りて表現するならば、雷帝が統治し活動した 16 世紀は、「ロシアにオプリーチニナと農奴制のみならず、地方行政機関と全国議会、またロシア専制の最初のイデオログのみならず、最初の農民主義者をも生み出した」時代であった²⁾。

だが雷帝の治世はまたロシア史上稀に見る矛盾に満ちた時代でもあった。ここでは勝利は敗北と背中合わせになっていたし、経済的發展と都市の成長はやがて経済危機と都市の農村化にとって代われ、領土の拡大は農民の中央地帯からの移住をひきおこした。商品貨幣経済の發展と新たに併合された諸地方の開発は農奴制の成立、強化と結びついていた。地方分権的な分領体制は国土をオプリーチニナ（特別皇室領）とゼームシチナ（オプリーチニナ以外の国土）に二分することによって克服されんとしていたし、オプリーチニナを成立させた専制は全国議회를召集した「身分代表王政」でもありえたのであった。

矛盾した時代はまた一つの矛盾した個性をその立役者としてもっていた。イヴァンは知的にして粗野、大胆にして疑心暗鬼、勇敢にして臆病、信仰深くして瀆神的、行動的にして思索的、受難者でありながら迫害者、慈悲深くして残忍であった。また愛情と憎悪、忍耐と癩癩、信頼と不信、天才と狂気、尊大と卑下、自信と後悔、改革と時代錯誤、建築と破壊が同時に彼の個性を彩っていた。

それゆえこのような時代とその立役者に、これまで多くの文献や作品——研究文献のみならず、同時代人の回想、年代記記録、民話、民謡、後代の小説、絵

2) Н. Е. Носов, 《Становление сословно-представительных учреждений в России》 Л. 1969, стр. 5.

画、音楽、映画等々——が献げられてきたとしても不思議ではない。本稿はそのなかでも主に歴史家の研究文献をとりあげて、雷帝がそのなかでどのような扱われ方をしてきたのかをさぐることを目的としている。この意味で本稿は雷帝とその治世を研究するに際しての前提たる研究史概観という性格をもっている。そこでここに研究史概観がとくに雷帝研究においてもっている重要性について一言しておくのも無益ではあるまい。この重要性は他の対象の場合よりもはるかに大きい。それは第一に、雷帝という対象自体の重要性から来ている。彼の治世は既述のように、ロシア史上画期的な時代であった。対象の重要性は研究者数の多いことのうちにも表われている。ここに一つの整理の試みが要請されている。第二に、研究自体がきわめて困難であった。それは何よりも史料状況によっている。雷帝とその治世に関する史料は量的には決して少なくないにもかかわらず、断片的であり、それゆえ個々の、時には平凡と思える事実ですらそれを確定することが困難であった。事実の確定が困難であるとき、歴史家の判断は多様になる。そしてその対象のもつ歴史の意味が大きければ大きいほど、歴史家の判断はさらに多様になり、時には激しく対立することになる。雷帝研究の歴史にはこのような例が多くある。第三に雷帝研究が個々の歴史家にとって常に「同時代的」な意味をもつことが多かったという事情がある。雷帝はいつの時代にあっても単なる歴史上の人物ではなく、すぐれて「同時代的」な人物であった。この意味で雷帝研究の歴史を辿ることは、それぞれの時代の歴史家自体のあり方をも考察することにつながるように思われる。本稿でこの点にとくに立ちいって論じることができないが、筆者はそれを少なくとも念頭において考察を進めたいと考えている。

さて以下の研究史概観においては18世紀以降の歴史家や思想家がとりあげられる。雷帝とその治世については、すでに同時代人ないしそれにすぐ続く時代の人々も記述を残している。とくに A. M. クールプスキー公は雷帝と直接に書簡をやりとりし、彼の治世を批判する著述まで残している。だが本稿ではそれらは考察の対象としない。それはこれら同時代人の記述が雷帝治世を「歴史的に」評価しうる立場になかったと考えられるからである。またこれらの記述

は実地の見聞に基づく貴重なものでありながら、逆に主観的にすぎ、歴史史料として用いるに際しては特別の手続きを必要とするからでもある。それにたいし本稿では雷帝とその治世を一応「歴史的に」評価可能となった時代の人々の見解をとりあげることとする。それはロシアに「歴史家」とよぶにふさわしい人々の出現した18世紀頃に可能となったと考えられる³⁾。

1. Н. М. Каламジーンの雷帝観

雷帝研究史上最初にとりあげられるべき歴史家は Н. М. Каламジーン (1766-1826) であろう。彼は著者『ロシア国家史』(全12巻, 1816-1829年)

3) ここで雷帝(とその治世)に関する研究の歴史を概観した文献とそれらの背景を知るための史学史全般に関わる文献の主たるものを挙げておこう。以下で利用される場合これらの文献は著者名ないし書名の一部とページ数のみが示される。まず雷帝研究の歴史については、С. Ф. Платонов, Иван Грозный в русской историографии, в: 《Русское прошлое》, т. 1. Пг.-Л. 1923. стр. 3-12. (⇒《Readings in Russian History》, NY 1962, v. I. pp. 188-194); С. Б. Веселовский, Обзор мнений историков об опричном дворе царя Ивана, в кн. 《Исследования по истории опричнины》, М. 1963, стр. 11-37; И. У. Будовниц, Иван Грозный в русской исторической литературе, 《Исторические Записки》, т. 21 (1947), стр. 271-330; G. H. Bolsover, Ivan the Terrible in Russian Historiography, in 《Transactions of the Royal Historical Society》 Fifth Series, vol. 7, London 1957, pp. 71-89.; L. Yaresh, Ivan the Terrible and the Oprichnina, in C. Black (ed.) 《Rewriting Russian History》, NY. 1959, pp. 224-241. さらに А. А. Зимин の二冊の著書の研究史概観 (《Реформы Ивана Грозного》 М. 1960, стр. 7-62; 《Опричнина Ивана Грозного》, М. 1964, стр. 6-54) が有益である。

次に史学史全般に関しては、Н. Л. Рубинштейн, 《Русская историография》, М. 1941; 《Очерки истории исторической науки в СССР》 под ред. М. Н. Тихомирова и др., I (М. 1955), II (М. 1960); Л. В. Черепнин, 《Русская историография до XIX века》 М. 1957; 《Историография истории СССР с древнейших времен до великой октябрьской социалистической революции》 под ред. В. Е. Иллерицкого и И. А. Кудрявцева, Изд. второе, исправленное и дополненное, М. 1961; А. Л. Шапиро, 《Русская историография в период империализма》, Л. 1962; В. И. Астахов, 《Курс лекции по русской историографии (до конца XIX в.)》 Харьков 1965; А. М. Сахаров, 《Историография истории СССР. Досоветский период》, М. 1978; A. G. Mazour, 《Modern Russian Historiography》, A Revised Edition, Westport, Connecticut, 1975; A. G. Mazour, 《The Writing of History in the Soviet Union》, Stanford, 1971 などが参考になる。

の第8, 第9巻で雷帝治世を扱っているが⁴⁾, その叙述は年代記等の豊富な史料に基づき, 詳細に及んでおり, そこで示された雷帝像は同時代および後代の歴史家に与えた影響の点で大きなものがあった。

もちろんカラムジーン以前の歴史家たちも雷帝に言及していたし⁵⁾, 後の歴史家たちの見解を先取りするような, いくつかの興味深い視点を提出する場合もあった。たとえば「ロシア最初の歴史家」とよばれる B. H. タチーシチェフ (1686-1750) は, その『ロシア史』のなかで「専制」самовластие を最良の国制とする立場から, 雷帝治世を次のように肯定的に描いている。「(雷帝は) カザンとアストラハンを征服した……もし幾人かの放逸な門閥貴族 вельможа らの反抗と裏切りが妨害しなかったら, 一度征服したりヴォニアとリトワの少なからざる部分とを維持することは, 彼にとってももちろん困難なことではなかったであろう。」⁶⁾。

さらに彼は別の著作のなかでロシアの門閥貴族が国家にいかにも多くの不幸をもたらしてきたかを説いたあと, 次のように記している。「これらすべての大きな原因は彼らの家柄の誇示にある。ツァーリ・ヨアン一世以来すべての君主らがこれを根絶せんと努めたが, 誰一人として成功しなかった。ピョートル大帝は……これら古来の無秩序をすべて絶滅し, 行政と軍隊において秩序を打ちたて, かくて自己と祖国に永遠の利益と栄光とをもたらした。」⁷⁾ 雷帝はタチー

4) Н. М. Карамзин, 《История государства Российскаго》, т. I-XII, СПб. 1816-1829. 本稿では П. Н. Полевой 監修の 1892 年版のリプリント (Slavistic Printings and Reprintings 189, The Hague/Paris 1969) を利用するが, 引用に際しては VIII-67 の如く巻数とページ数のみを記す。また括弧内は特に断わりのない場合は引用者のものである。(これらの原則は以下, 他の場合にも適用される。)

5) 18世紀のロシア史学史については, とくに С. Л. Пештич, 《Русская историография XVIII века》, ч. I (Л. 1961), ч. II (Л. 1965), ч. III (Л. 1971) が参考になる。

6) Зимин, 《Реформы》 11.

7) В. Н. Татищев, Разговор двух приятелей о пользе науки и училищах, в: В. Н. Татищев, 《Избранные произведения》 под ред. С. Н. Валка, Л. 1979, стр. 101 もっともここで「ツァーリ・ヨアン一世」を Будовниц 277 の如く, 雷帝のことと即断することは問題である。少なくともこの選集の編者はこの「ヨアン一世」をイヴァン三世と解している(см. стр. 435 の указатель)。確かにタチーシチェフは上の〈Разговор〉 стр. 127 では, はっきりと 〈Иоанн Первый и

シチェフにとってピョートル大帝同様、ロシアを強国に仕立てあげた立役者であったわけである。だが、「歴史家」として初めて大部の『ロシア史』（全5巻、第1—4巻 1768—84年、第5巻 1848年）を著わしたタチーシチェフも、ここでは雷帝の父ヴァシーリー三世期までを何とか執筆しえたにすぎず、雷帝については生の資料（『ニコン年代記』や『ツァーリの書』などの年代記類からの抜き書き等）を集めただけに終わったのであった⁸⁾。

同様に雷帝をピョートル大帝の先駆者とし、両者が共に「全世界をしてロシア人を恐れせしむるために」苦闘したことを称えた M. B. ロモノーソフも⁹⁾、また雷帝をルイ11世と比較した И. Н. ボルチン¹⁰⁾も雷帝とその治世を特別に考察したことはなかった。例外は M. M. シチュエルバートフ（1733—1790）であろう。彼は自己の『最古からのロシア史』（全7巻、1770—1790年）の第5巻において雷帝治世を扱っているのみならず、その扱い方においてもタチーシチェフらと異なっていた。彼は専制そのものは否定しない。だが「貴族の特権と自由」の擁護者として、無制限の専制権力には反対であった。それゆえオプリーチナ期の雷帝治世は彼にとっては認めがたいものであった¹¹⁾。

カラムジーンの雷帝観はこのシチュエルバートフの見解を継ぐものであった。彼の『ロシア国家史』第8巻は1560年までの雷帝治世を扱い、5章に分れている。第1章は父ヴァシーリー三世の死（1533）後、母エレナ・グリンスカヤの死（1538）までを扱い、第2章はそれ以降雷帝戴冠（1547）直前まで、第3章は戴冠からカザン征討に至る過程を描き、第4章はカザン戦役（1552）、第5章

Грозный именованный>（「雷帝とよばれているヨアン一世」）と述べているが、別の作品《Избранные произведения》стр. 393）では、イヴァン三世が「ツァーリにして大帝とよばれるヨアン一世」とされており、雷帝は「雷帝とよばれるヨアン二世」とされている。また《История Российская》т. VI (М.-Л. 1966) стр. 139 сл. では雷帝は「ヨアン五世」とされるなど一定していない。

8) Будовниц 277, Рубинштейн 85.

9) Будовниц, 278 を参照。

10) Там же, 279.

11) Там же, 279—280. さらに Рубинштейн 132—134. とくに И. А. Федосов, 《История русской общественной мысли XVIII столетия. М. М. Шербаатов》М. 1967. стр. 60—64 を参照。

はその後皇妃アナスターシアの死 (1560) に至るまでを描いている。第9巻は雷帝治世の後半期にあてられている。全7章から成り、第1章は皇妃の死後雷帝の心に起った変化とその帰結を1564年に至るまで描き、第2章においては1563年から1569年まで、オプリーチニナの導入が中心に叙述される。第3章はオプリーチニナの後半期が、第4章はオプリーチニナ廃止から1577年まで、第5章はリヴォニア戦争末期の雷帝治世 (1577-1582年)、第6章はロシアのシベリア進出、最終章是最晩年の雷帝治世 (1582-84年) が扱われている。

以上の章別構成からも分るようにカラムジーンのイヴァン観の特徴の一つは、1560年、すなわち皇妃アナスターシアの死をもって雷帝治世を二分している点にある。まずこの点からみていこう。カラムジーンによれば、イヴァンは「燃えるような感情とたぐい稀な知力、特別な意志力をもって生れており」(VIII-48, CM. IX-5) 然るべき教育さえ施されたなら、偉大な君主にふさわしい資質をすべて獲得したであろう。だが生れ育った環境と時代の状況がそれを阻んだ。幼少時のイヴァンは国制の実権をめぐる貴族派閥間の抗争の波に弄ばれ、教育をうけるどころか逆に「権力欲さらには残忍への嗜好すらも」(VIII-49) うえつけられた。イヴァンが無学である方が彼らの権勢欲を満たすためには好都合であったからである。かくて若きツァーリは「己をツァーリとして誇示せんと欲」するようになったが、それも「賢き統治を行うことにおいてではなく、(人を) 処罰し、奔放な気まぐれを示すことにおいてであった。」(VIII-59) イヴァンのこのような性格に変化をもたらし、それまでの「悪政」に終止符をうたせる契機となったのは、1547年のモスクワにおける戦慄すべき大火と民衆暴動であった。このとき「女性としてのすべての徳目……すなわち堅実な知性と結びついた無垢、謙遜、敬虔、多感 寛仁」(VIII-59) を備えていた皇妃アナスターシアの祈りと「高名も名誉も富も求めぬ」「謙遜な司祭」(VIII-63) シリヴェストルの訓戒とにより、「ヨアンは別人となった。」(VIII-63) ここに「ヨアンの栄光の時代、国家にとっての幸運な成功と大いなる企図に象徴された、新しい熱心な統治活動」(VIII-64) が始まったのである。それは「賢明なる節度、人間愛、柔和と平和の精神」(VIII-67) に満ちた統治である。イヴァンはシリヴェ

ストルと A. Ф. アダーシェフを中心とする「神聖同盟」(VIII-68) と共に自ら政務に携わり、「法典」や「百章令」の発布、「門地制」の制限、地方行政改革、教会の刷新、外国人技術者の招聘と次々に改革策を進め、ついにはカザンを征服し、アストラハンを征服する。リヴォニアにも進出を始める……だが、「天は彼とロシアの運命に恐ろしい変化を準備していた。」(VIII-194) 最愛の妃アナスターシアの死である。「ここにヨアンとロシアの幸福な日々は終わった」(VIII-195) とカラムジーンは述べている。

それに続くのは「ヨアンの暴政 тиранство Иоанново」(IX-13) の時代である。それはまずシリヴェストルとアダーシェフの失脚から始まる。「狂暴な吸血鬼」(IX-274) と化した雷帝は新たな側近たちとともに、恐怖政治を開始する。それとともに交戦中の相手国リトワへの貴族らの亡命も続出する。クールプスキー公がその代表である。戦況が不利になる。かくて「ヨアンの心は安まらなかった。彼の心は怒りにますますかき立てられ、不信の念に苛まれた。彼にはすべての善き門閥貴族たちが、隠れた悪党、クールプスキーの共犯者のように思われた。」(IX-46~47) 彼は 1564 年の初め突如としてモスクワを去る。困惑したモスクワの聖職者、貴族、高官、役人から商人や町人に至るまですべての者が、ツァーリに「再び自己の国家を引き受けるように」(IX-50) 懇願した。かくてモスクワに戻った雷帝はオプリーチニナを創設した。カラムジーンはこのオプリーチニナ創設をもって「処刑の第二期」の始まりとしている。彼は雷帝治世に全部で六つの「処刑」ないし「殺人」や「迫害」の時期を認めているが、そのうち第 1 期は 1560 年にイヴァンが心変りをしてからオプリーチニナ導入までの時期を、第 2~第 5 期はオプリーチニナ期、第 6 期はおよそ 1577 年に至る時期、すなわちオプリーチニナ直後を指している。ここでカラムジーンはオプリーチニナを特別な時期として他から区別するというよりは、1560 年以後を全体として一つの「暴政」の時期とみる見方をとっているのである。

雷帝治世をアナスターシアの死で二分し、前半を肯定的に、後半を否定的に描くという手法は実はカラムジーンにのみ特徴的であるわけではない。すでに『1617 年の年代記』^{フロノグラフ}がこのような見方をしていたし¹²⁾、シチェルバートフがま

たそうであった¹³⁾。彼の後もこの見方は、主として彼自身の著述を通じて、多くの人々によって採用されて行く。カラムジーンのこのような立場は、おそらく彼が雷帝個人の性格や心理を分析の中心にしていることと関連する。たとえばオプリーチニナに関する彼の叙述をみてみよう。彼によれば、オプリーチニナは雷帝の「安全」にたいする過度の恐れ、「疑心と臆病」から創設された (IX-51)。だがこの「疑心」は根拠のないものであった。ロシア人は専制にたいし一貫して忠実であったからである。それゆえツァーリにたいする「陰謀」などは存在しえなかった。「このような陰謀はただツァーリの混乱した頭脳のなかにのみ存在した。」 (IX-273) こうしてカラムジーンにとってオプリーチニナとはイヴァンが「自己と国家の安全のために組織した」「特別の親衛隊」以外の何物でもなかった (IX-51)。カラムジーンはこのようにオプリーチニナをもっぱら心理的要因から見ていたので、彼にはオプリーチニナに何らかの政治的意味があるようには思えなかった。それは「暴政の前代未聞の恐怖」であり、国家の「狂気の分割」でしかなかった (IX-131)。それはいわば一種の心理的謎であった。というよりカラムジーンにとってはむしろイヴァン自身が謎であった。彼は次のように述べる。「あらゆる思弁的な解釈にもかかわらず、青年期には有徳の英雄、壮年期ならびに老年期には狂暴な吸血鬼であったヨアンの性格は、知性にとっては謎である。」 (IX-274) イヴァンは古代ローマ帝国のカリグラヤネロ、あるいはフランスのルイ 11 世に比せらるべき「暴君」であった (IX-274)。だが彼には「悪の極限においてすらあたかも偉大なる君主の面影がある。熱心で、倦むことを知らず、国政においてはしばしば透徹した眼をもっていた。」 (IX-275) 彼は偉大なる征服者であり、すぐれた偽政者・立法者であり、「裁判においては正義を愛し」、種々の「信仰に寛容」を示し、民衆によって称えられた。カラムジーンにとってイヴァンはそれ自体一個の謎、「善と悪の混合体」であったのである (IX-274~276)¹⁴⁾。

12) Зимин, 《Реформы》 9-10.

13) Рубинштейн 133. ただし Федосов 61 はルビンシュテインを批判している。

14) カラムジーンが専制そのものの批判者でなかったことは、以上の論述からも明らかであると思うが、その点を含めて彼の政治的立場全般については、さしあたり R.

2. 批判者たち

カラムジーンはその『ロシア国家史』によって歴史家としての揺るぎなき権威を獲得した。同様に以上の如き彼の雷帝観もロシア社会と歴史家たちの間にあって長い間支配的な地位を占め続けた¹⁵⁾。だがそれに対立する観点がなかったわけではない。彼を批判する者はすでにその存命中に現われていた。たとえば H. C. アルツィバーシェフ (1773-1841) である。

アルツィバーシェフは1828年、カラムジーンの『ロシア国家史』を論評した際に、いわゆる「懐疑学派」的な立場から、カラムジーンの史料への過度の依存や、誇張した叙述法等について批判したのであったが¹⁶⁾、それに先立つ1821年に、すでにその論文「ヨアン・ヴァシリエヴィチ帝の個性について」においてカラムジーン流のイヴァン観を否定していた¹⁷⁾。彼によれば、これまで内外の文人が雷帝を「残忍この上ない暴君」(18-126)とよび、口をきわめて「彼の不名誉な記憶」(18-126)を非難してきたが、こうした態度は正しくない。歴史家たるものは「誹謗者の役割をわが身に引きうけてはならない」からである。もちろん雷帝治世に「処刑」がなかったわけではない。だが問題は、「ツァーリの残忍性」が彼自身の性格に由来するののか、それとも「状況」によって

Pipes, Karamzin's conception of the monarchy, 《Harvard Slavic Studies》IV, 1957, pp. 35-58 (cf. 《Essays on Karamzin》ed. by J. L. Black. The Hague/Paris 1975, pp. 105-126) および J. L. Black, "Nicholas Karamzin and Russian Society in the Nineteenth Century: A Study in Russian Political and Historical Thought", Toronto/Buffalo, 1975 (とくに第4章), さらにЛ. Г. Кислягина, Формирование идеи самодержавия в политической концепции Н. М. Карамзина, в: 《Вопросы методологии и истории исторической науки》М. 1977, стр. 134-156 を参照。

15) カラムジーンの雷帝観をほぼ踏襲したと思われるのは Н. Полевой, や Н. Г. Устрялов, М. П. Погодин らである。これについては Зимин, 《Опричина》14-15, とくに観点を初期と後期で大きく変えている Погодин については Будовниц 284-286 を参照。またカラムジーン『ロシア国家史』の19世紀ロシア史学への影響とそれにたいする反響については, Black, "Nicholas Karamzin" のとくに序章と5章が参考になる。

16) これについては《Очерки》I, 337 を参照。

17) Н. Арцыбашев, О свойствах Царя Иоанна Васильевича, 《Вестник Евро-

余儀なくされたものであったのかにある。イヴァンが生れつき残忍な性格の持主であったのでなかったことは、その悲惨な生い立ちを見れば分る。横暴な貴族たちに取り囲まれていたにもかかわらず、彼は「自己の過誤に気付き、教会ならびに民衆と和解し、すべての者を仲裁し、有徳の人物となった。」(18-133) アナスターシアの死後、彼が「過度の厳格さ」(18-135) を発揮し始めたのはすべて廷臣らの教唆によるものであった。「処刑」第二期から第六期までに関しても、すべてはクールプスキーら貴族の裏切のゆえであるか——アルツィバーシェフは「仮想上の裏切者らの処刑が始まった。これらの者があたかもクールプスキーとともにヨアンや故人となった皇妃アナスターシアそして彼の子供らの生命をねらったとでも言うかのように」と述べるカラムジーン¹⁸⁾を強く批判している——あるいは部分的にはその「処刑」自体が同時代人(タウベ、クルーゼ、グアニーニら)の虚偽の報告にもとづく根拠のない話でしかない。結局、「永遠の君主と言うにふさわしい人物の弱さの原因は貴族たちであった。彼らは有徳の王、そして恐れを知らぬ英雄の性格をねじ曲げてしまった。彼らは『天の怒りの大杯』を自己と祖国の上におちませたのである。」(19-191)

このようにアルツィバーシェフはカラムジーンを批判したのであったが、彼自身の見解にもいくつかの不備のあることは否めない。たとえば、彼はカラムジーンと異なってイヴァンを高く評価したのであるが、イヴァンが何故そのように評価されるべきなのかについては述べることがない。また彼はイヴァンの「残忍性」の原因を「状況」のうちに求めているが、彼にとってこの「状況」とは個々の貴族の裏切や横暴にすぎない。さらにまたイヴァンによる数々の「処刑」は彼にあっては、あるいは貴族や廷臣らの責任に帰されるか、あるいはそれを伝える「悪意の人々」の報告の信憑性を疑問視することで棚上げされるかであるが、これではイヴァンがあたかも独立した人格ではないかのような印象を与える。結局のところ、雷帝評価の点ではカラムジーンと異なっているアルツィバーシェフも、分析方法においては彼と余り異なるところがないよ

пы), ч. 120, № 18 (1821), стр. 126-141, № 19 (1821) стр. 184-200.

18) Карамзин, 《История》, IX-52 (傍点強調は栗生沢)。

うにみえる。彼も雷帝をもっぱら個人としてしかみておらず、「状況」を口にしながらいの社会的状況のなかで考察することはしなかったのであった。彼が雷帝治世をアナスターシアの死で二分するカラムジーンの立場に無批判でいるのもこのことと無関係ではないであろう。

カラムジーンと対照的なデルプト大学教授 J. Ph. G. エーヴェルス (1781-1830) の見解も興味深い。彼は人類社会の歴史を、家族から氏族、種族を経て国家へと発展するものとみなし、そうした立場からとくに国制と法制の歴史を研究し、後のいわゆる「国家学派」(ないし「法学派」)の人々に一定の影響を与えたことで知られているが¹⁹⁾、1816年に発表した『ロシア人の歴史』²⁰⁾において雷帝治世をも扱っている。本書は著者のロシア史研究の第一期を代表する著述であるが²¹⁾、6世紀から17世紀末までのロシア史を四期(第一期552-1015年、第二期1015-1224年、第三期1224-1533年、第四期1534-1689年)に分ける。雷帝治世は第四期の冒頭に位置している。著者は序文において、「諸公や彼らの戦役」また「支配者の弱点や宮廷陰謀の経緯」にのみ興味を示す歴史家たちを批判しながら、「ロシア国家の内的発展の歴史」を重視する立場を表明している。そのため彼はとくに「法と同盟関係」(条約等)に注目するが、それは前者が「諸民族の内的事情を知るための根源」であるからであり、後者は「彼らが外部にむかって行動する際の原則」をなすものであるからである。事実彼は本文においても、各章で諸公ごとの叙述を終えた後に必ず、国制、行政、商工業、市民の状況、風俗と宗教、さらには国際関係、法律、文化と学術など

19) エーヴェルスについては比較的最近次のようなモノグラフが出た。В. И. Шевцов, Густав Эверс и русская историография, 《Вопросы Истории》(以下 ВИ) 1975, № 3, стр. 55-70. (その氏族理論については、とくに стр. 61-69)。「国家学派」への影響については、さらに А. Н. Цамутали, 《Борьба течений в русской историографии во второй половине XIX века》, Л. 1977, стр. 18-19, 42, とくに第2章(стр. 76 сл.)をも参照。

20) J. Ph. G. Ewers, 《Geschichte der Russen》, Erster Theil, Dorpat, 1816「序文」にはページが打たれていない。雷帝に関する叙述は SS. 259-309. なお本書の第二部は結局現われなかった。

21) 後期の代表作は主著《Das älteste Recht der Russen in seiner geschichtlichen Entwicklung》, Dorpat/Hamburg, 1826である。

について広く考察している。

さてエーヴェルススの雷帝観であるが、彼にとって雷帝は何よりもロシア国家に秩序をもたらし、それを改革し強化した強力な君主であった。彼はカザン征服やリヴォニアをめぐるリトワ・ポーランド、スウェーデンとの戦争を強行するなかで、軍制を改革し、門地制に制限を加えた。さらに英国人を中心とする外国商人に特権を与え、西欧の職人、医者、薬剤師、鉦夫等の専門家を招き入れて産業の発展、技術・文化・学問の向上に努めた。彼はまた教会・修道院の刷新を行い、学校や印刷所を建て、法典（1550年の *Судебник*）を發布した。とくにこの法典を中心とする雷帝治世の法制について彼は全叙述の約 1/3 の分量を費して詳しく検討している。このことから分るように著者には雷帝の心理をさぐり、個人生活の様々な体験が雷帝の性格を通して国政に与えた影響をおしはかろうとする志向はない。無論彼とても雷帝が14歳にして「自己の権限と威力」(261) に目覚め、その無制限の行使に喜びと解放感を覚えたことを伝えている。だが彼はこのことを詳しく物語ろうとはしない。自ら進んで「歴史の絵画」を描こうとしたカラムジーンとは異なる態度がここにはある。

次に著者のオプリーチニナ観をみてみよう。彼はオプリーチニナを何か特別な国家制度ないし時代とはみていない。彼によれば、自己の権力に目覚めて以来雷帝は、その権威に従順でない者たちにたいして一貫して「厳格かつ無慈悲」(262) な対処の仕方をしてきた。著者は1547年の大火や1553年の雷帝の病、1560年のアナスタシアの死などにふれることがない。オプリーチニナは雷帝の一貫した「残酷性」とそれにたいする「^{フォルク}国民」の不満によってひきおこされた。著者はこれを次のように表現している。「ロシア人の愛はイヴァンとともににはなかった。彼はそれを前代未聞の残酷さによって……自分からわきへとそらしてしまった。外国の技芸と学術を自国へ移植しようという彼の意向に国民精神は反発した。立法者にして支配者としての彼の改革策は貴族や聖職者にとって憤慨の種であった。恐れを抱いた者（雷帝）は不信のあまり、卑賤の出の若者からなる「^{オプリーチナ}特別隊員」とよばれる親衛隊員を自己の周りに集めた。」(270-271) このオプリーチニナは雷帝の「血なまぐさい命令を遂行すること」(271)

を目的としていたが、やがてそれは「あらゆる者、とくに高級貴族にたいする
グロイエル
恐怖政治へと変質してしまった。」(271)

オプリーチニナを単にツァーリ個人の親衛隊とみる見方は、少なくともエーヴェルスにおいてみられるような形では、皮相的にすぎるが、興味深いのは、彼が指摘している雷帝と「国民」との間の対立的関係である。というのも彼は他の箇所では、「彼(イヴァン)は『残酷帝』der Grausameなる名をつけられた。だが彼は公正を志し、大抵の場合国民の下層の人々にたいしては愛想がよかった」(262)と述べるなど、雷帝の「国民」への善政について語っているからである。著者は今の引用文からも窺えるように、普通「専制の熱烈なる擁護者」とされているが²²⁾、おそらく農民や下層民の苦難にも気付いていたにちがいない。彼は雷帝治世の考察を終えるにあたって次のように述べている。「たといイヴァンがこのような恩恵を国民の大部分のために施したのであったとしても、それでも彼は彼らの感謝の念を玉座の確たる支柱とみなすことはなかった。」(309)エーヴェルスは雷帝治世の悲劇性に気付いていたように思われる。

カラムジーンを批判したもう一人の人物、B. Г. ベリンスキー(1811-1848)の雷帝観も興味深い。彼は活発な文芸批評活動を行って、19世紀40年代のロシア文壇に大きな影響を与えたが、歴史への関心も早くから彼のうちに芽生えていた。彼は自ら認識していたように、歴史の専門家ではなく、「愛好者」であるにすぎなかったが、その膨大な数の評論のあちこちでロシアの歴史について、そして雷帝についても言及している。彼にとって雷帝の歴史的役割をめぐる問題はピョートル大帝の改革活動の意義をめぐる問題と並んで重要な意味をもっていた。彼は歴史研究における史料や事実のもつ意義を正しく理解する一方で、事実の単なる集積は歴史の「真の把握」にはつながらないことを指摘し、理論的分析ないし哲学的意味づけの必要性を説いたのであったが、その際彼が具体的に念頭においていたのは歴史発展の合法則性であり、歴史における人民大衆の役割の大きさであった。彼はロシア史発展の進歩的性格を主張し、農奴制に反対した。もとよりこのような立場が最初から不動のものとしてあったわけでは

22) 《Очерки》1, 283; Шевцов 61.

ない。それどころか彼の革命的民主主義者としての世界観（そして歴史観）は、複雑な過程を経て形成されていったものであることは周知のとおりである²³⁾。

彼の雷帝観も最初から一貫していたわけではなかった。H. モルドフチェンコはベリンスキーの雷帝観に関する特別の論文のなかで、それを四期に分けて考察しているが²⁴⁾、それも理由のないことではない。もっとも本稿の筆者は必ずしもモルドフチェンコの区分を妥当とは考えていない。むしろ二期ぐらいに分けた方がよいと思っている。まず彼の初期の雷帝観は、H. A. ポレヴォーイの『ロシア史初等読本』（1835年）への書評（1836年）からうかがうことができる²⁵⁾。このなかでベリンスキーはカラムジーンの『ロシア国家史』に比し、ポレヴォーイの書物は簡潔で要領のよい通史となっていることを称えた後で、ほかならぬ雷帝の評価に関してだけは、著者に賛成できないと言う。それはポレヴォーイが雷帝を「天才ではなく、単に非凡な人間」にすぎないとしていたからである。これにたいしベリンスキーは次のように考える。「人間は、その魂が大きければ大きいほど、また善行を施す力がそれに備わっていればいるほど、より深く罪の深みに落ちこみ、より一層筋金入りの悪人となる。ヨアンはかくの如き人物であった。それは精力的で、深遠かつ巨大な精神であった。」

続いてベリンスキーは、幼少時の困難な状況の中で人格を損なわれた雷帝が、ある時「人民の惨禍」を見て突然変貌をとげ、「善君」に変わったにもかかわらず、結局は暴君となってしまったのは何故なのかを考察する。雷帝は当初「民衆に属する人びと」 **люди народа** であるシリヴェストルとアダーシェフに政治を

23) ベリンスキーの歴史観・ロシア史観についてはさしあたり В. Е. Иллерицкий, 《История России в освещении революционеров-демократов》 М. 1963; とくに В. Е. Иллерицкий, 《Исторические взгляды В. Г. Белинского》, М. 1953 (ロシア史に関しては第4章 頁. 139-241) を参照のこと。またベリンスキーの人と思想全般については藤井一行, 『叛逆と真実の魂』, 青木書店 (東京), 1980年が参考になる。

24) Н. Мордовченко, Иван Грозный в оценках Белинского, 《Звезда》 1946, № 10-11, 頁. 183-191.

25) В. Г. Белинский, 《Полное собрание сочинений》, т. I (М. 1953), 頁. 314 及び т. II (М. 1953), 頁. 107-112. 以下引用はもっぱら т. II 頁. 108-110 からなされるので、文中にはとくに記さない。

委ねた。彼らは期待どおり「高潔に、無欲で、賢明に、首尾よく働いた。だが彼らはツァーリの意志に足枷をはめてしまった……彼の心は屈辱の念に苦しめられた。」決定的だったのは雷帝が病床に臥したときに起きた、後継者問題と貴族らの「反逆」である。この一件が雷帝に与えた「打撃はあまりに強かった……傷はあまりに深かった。ツァーリは復讐のために立ちあがった……狂暴で反逆的な貴族たちよ、恐れおののくがよい！」これに雷帝の「熱愛するアナスタシアの死」が加わる。かくて「彼の漸進的変貌、悪業への移行」が始まる。「復讐」の始まりである。「ヨアンにとって罪ある者は少なすぎた。貴族だけでは足りなかった。彼は都市をことごとく処罰した。彼は病気であった。彼は恐ろしき血の盃に酔いしれた。」

ベリンスキーはここで決して雷帝の「復讐」を無条件で正当化しようとはしていない。それどころか彼は雷帝の行為が「悪業」であることを隠そうとはしていない。彼は次のように述べる。「彼は復讐を、自分自身のための復讐を渴望した。だが人間は自分自身のためにではなく、ただ真理の事業、神の事業のためにのみ復讐を行う権利をもっている……復讐は甘い飲みものであるかもしれない。だが毒入りの飲みものである。それは自分自身を傷つけるさそりである……血も同様に危険で恐ろしい飲みものである。それは海水に似ている。多く飲めば飲むほどますます喉が渇いてくる。それは復讐の念を抑えようとしてもできない。油が火を抑えることがないのと同様である。」ベリンスキーはこのように雷帝の残虐行為が正当化しえないものであることを認識していた。だが彼にとって雷帝は、既述の如く大罪を犯すことができる点で「偉人」であった。「ただ天使だけが光の霊から闇の霊へと変わることができる」からである。「これは古典悲劇の暴君ではない。ローマ帝国の暴君ではない。そこでは暴君たちは自己の民と時代精神とを表現するものであった。雷帝は落ちた天使である。彼は自己の墮落のなかにあってさえ、時には鉄の如き強き性格と高き知恵の力とを発揮する。」²⁶⁾

26) Мордовченко, 188 は「レールモントフの詩」(後述)を書いた時点(1841年)でのベリンスキーを念頭において「もし彼が以前にはイヴァン雷帝治世の専制の強化

ベリンスキーの雷帝に関する最初のまとまった言及は以上のようなものであった。このなかで彼は、第一に雷帝の対貴族弾圧策を肯定することによってカラムジーンを批判し、第二には雷帝が「偉人」であることを説くことによってポレヴォーイを批判した。ただベリンスキーは、雷帝の血なまぐさい「復讐」が正当化されるのは何ゆえなのかについては明確に述べていない。この段階では彼が「偉人」であったこと、貴族らが彼の心を深く傷つけたことが語られているにすぎない。

ベリンスキーの後期の雷帝観はとくに1841年のいくつかの評論において表明されている。この段階に至っても彼の雷帝観が根本的に変わったわけではなく、むしろ深化ないし明確化したと考えた方がいいように思うが、この深化は周知のとおり、ベリンスキーが1840年代の初めに、いわゆる「現実との和解」の立場を放棄するに至ったことと無関係ではなかった。彼はとくに論文「レールモントフの詩」(1841年)²⁷⁾において、雷帝について次のように述べる。「クールプスキーが『血ぬられた男』とよんだ彼は、わが国の歴史においていかなる現象であっただろうか。はたして彼はカラムジーンがよんだようにわが国のルイ11世であっただろうか……それは大いなる偉業のために大発展を自己に要求する強力な天性であった。だが当時の半アジア的な習俗と対外的情勢という条件が彼にいかなる発展をも許さず、彼を粗野な自然の力に翻弄されるがままにまかせ、彼から現実を改造するあらゆる可能性を奪い取ってしまった。この強力なる天性、大いなる精神は自らの意志に反してねじ曲げられ、自らの出口と慰めをこの憎むべき、彼に敵対する現実にたいする狂気の復讐のうちにのみ見出すこととなった……ヨアン雷帝の暴政は深い意味もっている。それゆえにこそそれは迫害者への憎悪と嫌悪の念よりは、むしろ落ちた天の靈にたいする憐憫の情をひきおこすのである……おそらくこれは独特の偉人であった。ただ折悪しく、あまりにも早くロシアに出現しただけである。彼は大事業をなすべき使命をも

を単に肯定的な事実としてのみみていたとするならば、今や彼はその否定的諸結果をも考慮にいれている」と述べているが、これは上に示したとおり、不正確である。ベリンスキーの雷帝観には上に見たように最初からある種の抑制がはたらいていた。

27) Белинский, 《Полное собрание》 т. IV (М. 1954). стр. 479-547.

ってこの世にやって来たが、この世ではなすべきことのないのを見たのであった。」(IV-505)

以上に引用したベリンスキーの雷帝に関する見解は、その基本的な特徴においては前期のそれと変わるものではない。変化がみられるのは、雷帝が単に「偉人」であるばかりでなく、「偉業」をなすべき使命をもっていることが強調されていること。そしてそのような雷帝が挫折したのは、「彼に敵対的な現実」のゆえであったとされていることである。この場合の「偉業」とは言うまでもなく、「廃れつつある旧習との闘い、またそれによって国を断乎として改造すること」²⁸⁾を意味していた。その意味で「雷帝治世は、古きルーシの相貌と精神の最終的形成の時期であり、それと同時にその双方の否定の始まりであった。雷帝の人格にはこの否定の理念が体现されていた。」(VII-57) このような「偉業」を実際に成就したのはピョートル大帝にはかならなかった。ベリンスキーがロシアの歴史をこのピョートルをもって二分していたことはよく知られているが²⁹⁾、すでに30年代末に彼は「ヨアン四世、それは折悪しく出現し、自己の大事業の理念を威嚇 гроза をもって貫徹せしめたピョートル一世である」(III-20)と述べることによって、雷帝をピョートルの先行者と考える立場を表明していた。これにより彼は雷帝の「復讐」行為を「ロシア種族 русское племя の国家になろうとする努力³⁰⁾」、すなわち「国家」的観点から正当化するに至ったのである。雷帝の「暴政」は単なる個人の性格や心理の問題ではなく、「深い意味をもっている」とされたのはこのような意味においてなのであった。

3. 「国家学派」における雷帝像 (I)

— К. Д. Кавьерин の場合

上に見てきたように雷帝治世についての評価は二分していた。シチェルバートフ、カラムジーンのように治世後半期の「暴政」を糾弾するか、それともタ

28) Иллерицкий, 《Взгляды Белинского》, 168.

29) たとえば《Полное Собрание》III-18における発言などをみよ。

30) Иллерицкий, 《Взгляды Белинского》, 158 による。

チーンチェフ、とくにエーヴェルスやベリンスキーのように様々な理由をあげてそれを擁護し正当化するかであった。次に検討したいのは後者の立場をより理論的に展開し、後の研究者に大きな影響を与えることとなった、いわゆる「国家学派」ないし「法学派」あるいは「歴史法学派」の人々³¹⁾の雷帝観である。この学派の代表者は K. Д. カヴェーリン (1818-1885) や B. H. チチュエーリン (1828-1904) あるいは C. M. ソロヴィヨフ (1820-1879) らであるが³²⁾、雷帝研究との関連でとくに注目されるのはカヴェーリンとソロヴィヨフである。

カヴェーリンの論文「古代ロシア法慣習概観」(1847年)³³⁾は、ピョートル以前のロシアの「内的歴史がもっぱら血縁的、氏族的慣習の漸次的発展であった」(14) とする立場からロシア史の発展を概観したものである。彼によれば、ルーシには元来「純粹に家族的・氏族的慣習だけ」(11) しか存在しなかったが、ヴァリャーギ人の到来や、ロシアのキリスト教化とともにヨーロッパ的(ないしゲルマン的)な「人格(個人)の原理」が現れる。ことにヴァリャーギは、この原理に基づく「公民意識 гражданственность と政治的、国家的統一の最初の萌芽」(24) をルーシの地にもたらした。このようにして彼らは「社会的精神と公民的美徳の発展」(23) を阻害していた「血縁的慣習」を打破し始めたのであった。だがこのような古来からの慣習が即座に消え去ることはもちろ

31) 「国家学派」全般については、さしあたり鳥山成人「ペー・エヌ・ミリュコーフと『国家学派』」(『スラヴ研究』12 (1968), 1-57ページ) を参照されたい。その後に見られたいくつかの文献をつけ加えておくと、J. L. Black. The "State School" Interpretation of Russian History: A Re-appraisal of its Genetic Origins, in 《Jahrbücher für Geschichte Osteuropas》21-4 (1973), SS. 509-530; Black, "Nicholas Karamzin" とくにその第6章。ここでブラックは「国家と君主制の発展」への注目が、16世紀以来の「ロシア史の伝統的な手法」であったとする立場から、エーヴェルスよりもむしろカラムジーンを「国家学派」の祖と考えている。さらに上掲 Цамутали, 《Борьба течений》も全体として「国家学派」を扱っている。

32) ソロヴィヨフを「国家学派」の一員とみるかどうかについては、見解は分れている。鳥山論文2ページ、さらに Black, The "State School", S. 509 を参照。

33) K. Д. Кавелин, Взгляд на юридический быт древней Руси, 《Собрание сочинений》, т. I. СПб., 1897, стлб. 5-66. この論文は「ロシア史学における新傾向の代表者らの最初の綱領宣言」とみることのできるものであるが、この論文の意義については、Цамутали 《Борьба течений》, 41 сл. を参照。

んなかった。むしろロシアではそれは他の国々（とくにゲルマン民族の場合）よりも長く保持された。たとえばヴァリャーギの要素がほぼ消滅したヤロスラフ大公治世には、それは再び優勢となった。かくて「ヤロスラフは……氏族原理の上にルーシの国家生活を創建し、その政治的統一を樹立することを考えていた。」(26) つまり彼は新旧の両原理を調和させざるを得なかったのである。このようにして著者にとって、ヤロスラフからモスクワ台頭に至る時期のロシア国家の歴史とは、「氏族原理の発展の歴史であり、……その漸次的分解と衰退の歴史」(26) にほかならない。

さて氏族的原理の上に国家制度をおかざるを得なかったヤロスラフにあっては、ロシアの政治的統一を維持することは不可能であった。一族の諸公が各地に割拠する分領制の時代が始まった。このような状況のなかで北東ロシアのスーズダリ地方に新たな動きが出てくる。アンドレイ・ボゴリュープスキー公をその担い手とする「新原理は次のことを明らかにした。氏族原理に基づく国家制度は成り立たない。国家的慣習と血縁的慣習は敵対する。……血縁的原理が優勢になるや国家は消滅する。」(39) 新原理とは要するに国家的要因を最高度に強調することなのであるが、この方向をさらに推し進めたのがモスクワの諸公、特にイヴァン三世であった。著者はこれまでの発展を次のように要約している。「モスクワ諸大公によって創出された政治制度はロシア史においては何か完全に新しいものであった……ヤロスラフの制度は氏族原理に基づいており、ロシアを諸公国へと分割した。アンドレイ・ボゴリュープスキー後（前面に出てきた）家族が諸公国を、果てしなく分割されて行く世襲領^{ヴォツナ}に変えてしまった。モスクワの制度では……血縁的利益が政治的利益に席をゆずりつつある……行動舞台^{リーチノスチ}に個人が出てくる……それはイデー、すなわち国家の名においてそれら（血縁的慣習）を否定する。国家の出現は同時にまた排他的に血縁的な慣習からの解放でもあった。それは個人^{リーチノスチ}の自立的活動の原理、従って公民的で法的な、親族関係だけにに基づくのではなく、思想と精神的関心にも基づく社会的慣習の原理であった。」(44-45) もちろん「新原理」が即座に貫徹して行ったわけではない。モスクワ時代はむしろ新時代のための準備の時代でしかなか

った。そしてこの「準備行動」を開始し、完成させたのが「ロシア史のもっとも偉大な二人の活動家ヨアン四世とピョートル大帝」(46)であった。

以下に著者による雷帝と大帝の興味深い比較対照が行われる。彼らは活躍した時期においても、性格的にもまったく異なっていたが、その志向と活動の方向とにおいては明らかに似ていた。両者ともに同じ目的を追求した。彼らの間には「ある種の共感」が存在した。「ピョートル大帝はヨアン四世を深く尊敬し、彼を自分の模範とよび、自分以上に高く評価した。そして実際ピョートルの治世はヨアンの治世の継続であった。後者の未完の、途中で停止した改革をピョートルが継続した。」(47) 両者はともに「国家の観念」を生き生きと意識していたし、この観念を体現するにふさわしい人物であった。だが「この観念をヨアンは詩人として、ピョートル大帝は人間、それも実践的な人間として意識していた。前者にあっては想像力が、後者にあっては意志力が優っている。」(47) このように著者はイヴァンをピョートルと並ぶ偉大な人物として高く評価したのであったが、続いて何故イヴァンが「改革」を未完のままに放置せざるを得なかったかについて、次のように語る。「ヨアンは結局のところ、彼が生き行動することを運命づけられたところの、不明瞭な、半ば家父長的で、当時すでに意味を喪失していた環境の重荷のもとで力つきてしまった。長年にわたってそれと生命をかけて闘いながら、結果を見ることもなく、反響を見出すこともなく、彼は自己の企図を実現する可能性への信念を失ってしまった。その時生活は彼にとっては負いきれない重荷、絶えることのない苦しみとなった。彼は偽善者、暴君、臆病者となった。ヨアン四世はまさに偉大であったがゆえに、かくも深く落ちてしまった。」(47)

著者によれば、イヴァンが闘いその前に屈したところの「環境」とは、血縁的・氏族的原理の上に立ち、一族の私的利害のみをはかる諸公や貴族の存在にほかならなかつた。これにたいし彼は「国家だけに権力と自由を与えようとして」(52)、「門閥貴族層を完全に壊滅させ、自己の周りに貴族以外の人々、否、身分は低いが忠実で、彼と国家にいかなる下心ももたず、私的な計算もなしにすすんで仕えようとする人々をも集めようと欲した。」(52) このようにして設

立されたのがオプリーチニナであったが、「この、同時代の人々に誹謗され、後世の人々には理解されることのなかった制度は、ある人々が考えるように、ヨアンがロシアの国土から自己を分離し、自己をそれに敵対させようと望んで考え出したものではない。……オプリーチニナは勤務士族を創出し、氏族的門閥貴族層の代りにしようとする最初の試みである。」(52-53) では彼の試みは成功したであろうか。否である。オプリーチニナは「何らの利益ももたらさず、多くの災厄をひきおこした」(53) だけであった。だが著者は「ヨアンを責めることはしない。」(53) 何故なら彼が生きた時代が悪かったのであるから。それは「いかなる改革もわれらの慣習を改良することのできない不幸な時代」(53) であった。彼が門閥貴族らとの闘争に際し期待をかけたオプリーチニキも、書記たちも、地方の共同体も、依然として「旧来の、半ば家父長的な慣習」(53) にとらえられており、「社会的精神」に欠けていた。「社会そのものに、よりよき秩序のための要素が存在していなかった」(53) のである。「ヨアンは自己の思想を実現するための手段を捜し求めたが見出せなかった。……実りなき闘争に引き裂かれ苦しめられて、ヨアンは失敗の腹癒に復讐を行うことができただけであった。……同時代人は彼を呪った……後世の人々は彼に然るべき敬意を払うことがなかった。ただ一人だけが彼を理解した。彼の始めた事業の偉大なる継承者(ピョートル)が彼の事業を完成させ、ロシアの新しい門出を祝うべく運命づけられていた。」(53)

以上のようにカヴェーリンの雷帝観は先に見たエーヴェルスとベリンスキーのそれに非常に似ている。大雑把に、ロシア史全体の構想はエーヴェルスの「氏族理論」の、雷帝評価に関してはベリンスキーの影響を強く受けていると言ってよい。

そこで以下に雷帝評価の面でのカヴェーリンにたいするベリンスキーの影響の問題を見ておこう。一般的に前者が後者から大きな影響をうけたことはよく知られているが³⁴⁾、なかでも雷帝観に関してそれが顕著であることは、先のモルド

34) これについては Д. Л. Тальников, Концепция Кавелина и исторические

フチェンコの研究が示すとおりであり、われわれが上に見てきたところでもある。とくに雷帝をピョートルの先行者とし、両者をロシア「国家観念」の体現者とみたことのうちに、また彼が「偉大」であるがゆえに「深く落ちてしまった」支配者にとらえたことなどのうちに、影響は強く現われていた。ではカヴェーリンの雷帝観は何ら独自性を主張しえないものであったのだろうか。もちろんそうではない。このことは影響を与えた側のベリンスキーが一番よく理解していた。彼はカヴェーリンの上掲論文が刊行される前に、すでにその草稿を読んでいたが³⁵⁾、その読後感をゲルツェンあての書簡(1846年1月2日付並びに3月20日付)に記している。彼はカヴェーリン論文を「ロシア史(叙述)の歴史における画期的研究」とよび、ことに彼の「雷帝観を知って歓喜した」という。「わたしは雷帝のことを何か本能的にいつも考えてきた。だがわたしにはわたしの見解を正当化するだけの知識がなかった。」ベリンスキーによればそれを果たしたのがカヴェーリンであった³⁶⁾。確かにカヴェーリンにあっては、雷帝治世がロシア史全体の過程のうちに整合的に組みこまれていたと筆者も考えている。これはベリンスキーがなしえなかったところであった。だがベリンスキーが雷帝治世をロシア史全体の「構想」のなかで整合的に位置づけることができなかったのは、単に彼が歴史の素人であったからではない。筆者はすでに、彼の雷帝観には最初からある種の抑制がきいていることを指摘しておいた。雷帝の統治は必ずしも「進歩的」であるばかりではない、という認識はベリンスキーには一貫してあったと筆者は考えている。それは彼が早くから、「民衆」の運命に強い関心を示していたことと関連する。彼は自己の評論活動の最初から民間説話フォルクローレに強い関心を示し、そのうちに「民衆の精神」を読みとるべきことを主張していたが³⁷⁾、このような立場は雷帝を評価するに際しても貫

взгляды Белинского, 《ВИ》 1956-9, стр. 130-140. ただタリニコフはベリンスキーが晩年にはカヴェーリン的立場から大きな影響をうけていたことをも強調する。

35) Тальников 130.

36) В. Г. Белинский, 《Избранные письма в двух томах》, т. II, М. 1955, стр. 262, 273. これについてはさらに Мордовченко 183, 191 をみよ。

37) たとえば《Литературные мечтания》(1834)においてベリンスキーは、それまで

徹された。ただここで予め注意しておくべきことは、雷帝治世の正当化にある種の抑制を加えていたのは、ベリンスキーの民間説話への注目そのものであったわけではないということである。B. K. ソコロヴァが正しく指摘しているように、むしろ民謡等においてこそ、雷帝は民衆の「直接的抑圧者」を懲らしめた「正しい理想的なツァーリ」また「民衆の同盟者にして保護者」と称えられたのである³⁸⁾。ベリンスキーも最初は確かにこの立場を強くうち出していた。だがやがて彼はこのような立場が「現実」を正しく把握したものではないことに気がついてくる。彼は1841年、キルシヤ・ダニーロフの民謡集への批評文のなかで次のように述べている。「ここに見られるように雷帝の巨大な形象と恐ろしい記憶は民衆詩のうちに見事に反映され表現されている。それは肉と霊の巨人であり、ピョートル大帝の先行者、予告者である。彼は愚かで有限な民衆 народность の窮屈な束縛から逃れんと必死になっていた。彼は折悪しく出現し、自分自身からこの束縛をとりはずし、打ち砕くだけの力がなく、ただ彼に敵対的なこの国民 народность のゆえに、自己の民衆 народ にたいし手厳しく復讐をすゝるための力を自己のうちに見出したのであった。」(V-433~434 傍点は栗生沢) ここでは「復讐」の対象が、もはや「現実」ではなく、「民衆」となっているのである。

ベリンスキーの雷帝観に表れたこの側面はカヴェーリンにはまったく無縁であった。彼の心を占めていたのは「国家」の原理であり、「雷帝を恐ろしい行動に駆りたてた深い、客観的諸原因」を明らかにすることであった³⁹⁾。「民衆」の状況はカヴェーリンの視野には入っていなかった⁴⁰⁾。

さて以上に示されたカヴェーリンの雷帝観は彼の「国家学派」の立場とともに後の研究者にきわめて大きな影響を及ぼした。だが彼の雷帝観がその後、無批判に継承されていったわけではない。ここではおよそ百年後に C. B. ヴェ

のロシア文学が、いかに「民衆の精神」から離れていたかを力説している (《Полное собрание》, т. I. (M. 1953), стр. 20-104)

38) В. К. Соколова, 《Русские исторические песни XVI-XVIII вв.》 М. 1960, стр. 78-79.

39) Кавелин, 《Сочинения》 I, 640.

40) Тальников, 138-140.

セローフスキーがなした批判だけにふれておこう⁴¹⁾。彼は、ニコライ一世治世の反動がカラムジーン流の雷帝批判に対立する、雷帝復権の試みを生み出したことを指摘したあと、カヴェーリンをその代表者とするこの試みの基盤に二つの主要な思想を見出している。第一は雷帝を「政治家として称揚する」思想、第二は雷帝の「諸欠陥を国家利益の観点から正当化する」思想である。ヴェセローフスキーによれば、カヴェーリンの見解は全体として「事実と論理に反している」ので無視することも可能であるが、その影響力の大きさゆえに、適切な批判が必要である。彼の雷帝観が広く受け入れられるようになった原因の一つは、たとえば彼のオプリーチニナ観にある。彼はオプリーチニナの本質を、それが「氏族的門閥貴族層の代りに勤務士族を」、また「血縁的原則の代りに個人的価値をおいた」点に見たが、この「事実と反する見解」は、その後アレクサンドル二世の時代、ピーサレフの言う「思考するプロレタリアート」の出現の時代に、「素姓卑しき才能の持主たち」に社会的上昇の広い道を開き、かくて「自由主義的、革命的インテリゲンツィヤ」にうけ入れられることとなったという。他方、「カヴェーリンの専制の賛美は保守派と反動派グループの間で最も好意的な歓迎を見出した」のであった。ヴェセローフスキーにとって、カヴェーリンの雷帝観の誤りは結局のところ「事実の無知、知られている事実の不確かな利用、論理および一般に自己の思想の表現法にたいする極端な無頓着」に基づいていた。その結果「ツァーリ・イヴァンの祖父か父によってすではるか以前に達成されていたことが、あるいは彼の時代に、あるいは彼個人に帰せられるに至っている」のであった。ヴェセローフスキーのこのようなカヴェーリン批判は、百年後になされたもので、カヴェーリン個人の評価としては厳しすぎるように思われる。だがヴェセローフスキーが上の言葉にすぐ続いて「以上が百年以上前の事情であった。そして同じ情況が今日まで続いている」と述べるのを見ると、われわれは彼がカヴェーリン批判に名を借りて、実は彼と同時代（ヴェセローフスキーのこの文章は1944—45年に執筆された）のソヴェト研究者を厳しく批判していることを知るのである。

41) Веселовский, 16-19.